

明清江南市鎮の実態分析：湖州府を中心として

樊，樹志
復旦大学歴史系

<https://doi.org/10.15017/24595>

出版情報：九州大学東洋史論集. 16, pp.1-34, 1988-01-25. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

明清江南市鎮の実態分析

——湖州府を中心として——

樊 樹 志

はじめに

一 南潯鎮

二 烏青鎮

三 菱湖鎮

四 双林鎮

おわりに

はじめに

市鎮に関する評価は、今までいろいろな言われてきた。市鎮は郷村の一部分であり、都市ではないと言われているが、他方市鎮は小都市あるいは半都市であるとも言われている。このため、市鎮の実態を究明する必要がある。

太湖の南岸に臨む湖州は、宋代になって経済が発達してきた。民間の諺語には「蘇湖熟、天下足」とあり、そこから湖州経済の発達がうかがえる。

経済の中心地としての市鎮は嘉泰『吳興志』に見えるが、それらは、烏墩・施渚・梅谿・四安・新市・和平の六鎮である。若し、淳祐年間に成立した南潯鎮をふくめれば、南宋時代、湖州には七鎮があることになる。明代の嘉靖・万暦年間に至って湖州府には、烏鎮・南潯鎮・菁山市・妙喜市・菱湖鎮・埭溪市・埭市・双林鎮・馬家瀆鎮・递鋪鎮・梅谿鎮・四安

鎮・和平鎮・阜塘鎮・合溪鎮・水口鎮・塘棲鎮・三橋埠市・上陌埠市・沿干市の二十一市鎮がある。⁽¹⁾清代中葉、湖州府の市鎮は急速に増加し、例えば帰安県には、菱湖鎮・双林鎮・練市鎮・埭溪鎮・荻港鎮・善連鎮のほか、下昂市・千金市・石塚市・錢家潭市・東林市・射林市・東泊市・湖趺市・南商林市・重兆市・新興港市・竹墩市・双開市・後塘市・思溪市・潞村市・史舍市・含山市といった市がある。⁽⁴⁾

湖州府は伝統的蚕桑地区であり、市鎮はみな蚕桑業と絹織業を生業として、全国的に非常に有名な絲綢交易中心になった。南潯鎮・菱湖鎮・双林鎮の経済は、湖州府に対してだけでなく、全国に対しても、とても重要である。

一 南潯鎮

湖州府烏程県の南潯鎮は、太湖の南東岸に臨み、府治より吳江県に至る上塘運河が、鎮中を貫流している。全鎮は東柵から西柵まで三里あり、北柵から南柵まで七里ある。道光『南潯鎮志』には、

東西南北之通衢、周約十里、郁為巨鎮。

と述べられている。⁽⁵⁾その規模は県城の規模をはるかに凌駕していただけでなく、その経済も県城や府城をも超えていた。南潯鎮は湖絲の貿易の中心地として数百年にわたって、栄えていた。

南潯鎮は南宋理宗の淳祐年間に興起し、昔は潯溪や南林と呼ばれ、淳祐年間に南潯鎮と呼ばれるようになった。宋末元初、南潯鎮と烏鎮は肩をならべる湖州の大鎮であった。元人陳基の詩には、

南潯古名鎮

郁為商賈区

今日留兵戍

壁壘控江湖

と詠われている。⁽⁶⁾元末、張士誠はここに城牆を造立し、城牆の周長が千六十六丈五尺あった。⁽⁷⁾明初、南潯の城牆をさげ、四柵（すなわち東柵、西柵、南柵、北柵）が造立されている。東柵と西柵は吊橋があり、また城隍がある。鎮の商業区は漸次に運河南岸より北岸に移り、通津橋の辺りが中心区となった。明清両代、南潯鎮の規模が形成されている。

東から西へ運河が南から北へ市河が流れ、相互が鎮中で十文字にまじわり、鎮の中心部で十字港となった。十字港の周辺に、通津橋と清風橋と明月橋がある。運河・市河の両岸に街道がある。

大街——東柵上塘にあり、東は新橋・聞涛閣前に至り、西は清風橋に至る。

寿星街——西柵上塘にあり、東は清風橋に至り、西は務前（かつての稅務署前）に至る。

爆場街——北市河の東岸にあり、南は清風橋に至り、北は天帶橋に至る。

絲行埭——十字港の南、南市河の東岸にあり、北は明月橋に至り、南は東交界壩橋に至り、絲行（すなわち蚕糸牙行）の集中地である。

米廊下——十字港の西、務前の対岸に、すなわち西柵下塘にあり、東は豊年橋に至り、西は垂虹橋に至る。俗に米柵下と呼ばれた。米穀交易の中心地である。咸豊『南潯鎮志』には「乾隆以前此地米市最盛、故得此名」と述べられている。⁸⁾

樹行埭——西柵下塘にあり、東は沐鳳橋に至り、西は西柵に至る。

西木行——東は北柵椿橋に至り、西は西柵永安橋に至る。道光以降、「米市移于西木行」であった。⁹⁾

鎮の中心部の通津橋は市街すべての中枢であり、水陸碼頭とともに、商業中心区である。曹仁虎「潯溪竹枝詞」には、

紅蚕上簇四眠過

金繭成來欲化蛾

聽道今年絲佃好

通津橋口販船多

と詠われ、邢典の「南林雜詠」通津橋の条には「万戸周遭見、千艘日夜通」と詠われている。¹⁰⁾

潘尔夔の『潯溪文獻』は嘉靖・隆慶以来、南潯鎮はますます盛んになり、「闌闌鱗次、烟火万家、茗水流碧、舟航輻輳」であったといい、南潯人朱国禎は「潯雖鎮、一都会也」と述べる。¹¹⁾ 范穎居の『研北居瑣録』は、

前明科第極盛……当蚕糸入市、客商雲集、四民各習其業、彬彬一大鎮会矣。

と述べる。

万曆十六、十七年に、烏程知県は湖州より平望鎮に至る運河の堤岸を築いた。その全長は百二十里あり、荻塘あるいは東

塘と呼ばれ、南潯鎮と湖州、蘇州の間の陸上の交通要道になった。万曆三十六年、湖州知府は青石で堤岸を固め、南潯から平望までの荻塘が馳道になった。鎮の中心部を貫通する荻塘は、「市廛叢族、夾岸駢闐」である。¹²⁾

南潯鎮は、万曆以降に長く栄えていた。乾隆年間に、「市廛雲屯櫛比」の江南大鎮となり、「水則運河、陸則荻塘」、「其市各貨繁盛」であった。¹³⁾道光、咸豊以降、江南市鎮は次第に衰微したが、しかし南潯鎮は依然として盛んであり、「闌闐雲屯、煙火万家」、「非他邑所可仿佛」であった。¹⁴⁾ 当時人の詩には

水市千家聚、商魚舟結鄰……。

東西水柵市聲喧、小鎮千家抱水圓……。

閩閩墮駟儉忙、……畢集南粵金陵商。

とある。¹⁵⁾ 清末に至っても南潯鎮はなお盛んであり、杜俞『吳船日記』は、

南潯市井最盛、……兩省交界、太湖毗連、而浙省巨富多在此鎮、故地方尤為繁劇。

と述べる。¹⁶⁾ 一九三〇年代に、南潯鎮の経済命脈が打撃を受けてから、次第に衰微したが、しかし南潯鎮はやはり絲莊三家、絲廠二家、商店八百三十家、錢莊三家、典當五家という大きな規模であった。¹⁷⁾

南潯鎮の繁栄を支える重要な基盤は四通八達の水路交通と湖系の集散中心としての地位であった。南潯鎮の四通八達の水路は次のようである。

東は運河に沿って震沢鎮に至り、行程九里である。震沢鎮より平望鎮に至り、行程四十一里である。

西は運河に沿って、東遷鎮に至り、行程十二里である。東遷より旧館・晟舎を経て、湖州に至り、行程六十里である。

南は丁家橋に至り、行程五里である。丁家橋より烏鎮に至り、行程二十五里である。

北は太湖口に至り、行程十八里である。太湖口より東洞庭山に至り、行程三十六里である。

東南は陶墩村に至り、行程三里である。陶墩村より嚴墓市を経て、新塍鎮に至り、行程五十里である。新塍鎮より嘉興に至り、行程二十七里である。

東北は平望鎮、八斥市を経て、吳江県に至り、行程百里である。吳江より、蘇州に至り行程四十五里である。

西南へは輯里村に至り、行程七里である。輯里より馬要鎮に至り、行程十一里であり、馬要より双林鎮に至り、行程十八

里である。馬要より新市鎮に至り、行程五十四里である。新市より塘棲鎮に至り、行程五十四里である。塘棲より杭州に至り、行程五十四里である。¹⁸⁾

清末民初に、南潯鎮と近辺の市鎮との間に定期の航班がある。たとえば

南潯より上林・軋村・織里を経て、湖州に至る。

南潯より震沢・平望・八斥・吳江を経て、蘇州に至る。

南潯より震沢・王江を経て、嘉興に至る。

南潯より烏鎮・石湾を経て、長安鎮に至る。¹⁹⁾

そのほか、南潯鎮と四郷の交通は次のようであった。鎮と村との間を往復する木製航船はだいたい毎朝に各郷村より開船し、午後に鎮より郷村に戻る。蚕糸や新米の上市の時、郷人は朝船に乗り、鎮に来て、交易を行う。南潯鎮はこのように四郷農家を周辺の市鎮や外地の客商に結びつけて、広い市場圏を形成した。

南潯鎮の商品経済は非常に発達していた。

まず葉市である。葉市とはすなわち桑葉の市場と桑葉市の交易である。『遣聞瑣記』には、

蚕時往烏鎮做葉、是南潯一做俗、名為貿易、実同賭博。

と述べられている。南潯鎮人董蠡舟「稍葉」には、

吾郷則裁桑地狹、所産僅足飼小蚕、曰小葉。葉莫多于石門・桐郷、其牙儉則集于烏鎮。三眠後買業者以舟往、謂之開葉船、買完皆曰稍。吾鎮之饒裕者亦稍以射利、謂之作葉、又曰頓葉。

とある。烏鎮の四柵に葉行が置かれて、桑葉の交易を行う。一般に烏鎮の葉行は冬季に南潯鎮へ行って桑葉を売り、定金を受取る。来年に桑葉を繳収する。

次は、繭市である。南潯鎮辺り蚕戸はいつも外地へ行って、繭を買う。董恂の『南潯志稿』には、

近時多有住嘉興一帶買繭婦、繅糸售之者、亦有載繭來鬻者。

と記されている。²⁰⁾

次は糸市である。「湖絲甲天下」といわれ南潯鎮は湖糸の交易中心地であるから、各地の客商が参集した。『南潯鎮志』に、

毎年新糸告成 商賈輻輳、而蘇杭兩織造皆至此收焉。……小滿後新糸市最盛、列肆喧闐、衢路擁塞。

とある。南潯鎮には糸行が沢山あった。各地の客商はここに集まり、交易を展開するために、会馆と公所を設けた。たとえば、

寧紹会馆——北柵の外下壩にあつて、嘉慶年間に建てられた。

新安会馆——南柵の寓園の近辺にあつて、道光十一年に建てられた。

金陵会馆——南柵の広勝橋の東北にあり、光緒十年に建てられた。

閩公所——すなわち福建会馆である。南柵の陳家墩に建てられた。

糸業公所——同治四年に、糸商莊祖綬などが建てた。

葉市や繭市・糸市のほかに、棉布市もある。南潯の四郷は棉布を出産しないけれども、農家皆布を織る。棉花は東へ百里の農家より鎮中に運ばれる。牙行は棉花を買つて、また農家に売る。牙行は安吉・孝豊などの県の客商に棉布を売る。南潯人施国祁の「吉貝居暇唱自序」は、

去南潯之東百里而遙、地沿海、田之高仰者宜木棉、其鄉民大半植此、夏種秋收、採集既多 即捆載而易錢于西賈。潯之西百里而近、地多岡阜、為茶粟竹木山場、俗少女工、時因其地所出、亦捆而易布于東賈。潯市居其中、四郷之人自農桑外、女工尚焉、椎車・踮弓・紡織織機、率家有之。村民之市買棉婦諸婦、婦女日業于此、且篝燈相從、夜亦作、一月得四十五日工、計日成匹、旋以易棉、蚩蚩統來不已。市之賈俟新棉出、以錢貿于東之人、委積肆中、高下若霜雪、即有抱布者踵門、較其中幅以時估之、棉与布交易而退。随有西之人齎錢來計布值、合則書劑与之去。而錢存焉。

と述べる。このように、農家の生産は「自給自足」の家内手工業ではなく、その原料と産品はみな商品であり、この家内手工業は商品経済の段階、すなわち商品生産であった。このために、南潯鎮の四郷の農家は専ら蚕桑、繅糸、棉布を生計の手段とするようになり、「無復有種種菽粟」であり、商品に糧を頼った。「南潯鎮志」が、

本地所出之米、納糧外不足供本地之食、必頼客米接濟。

と述べているように、南潯鎮の米市は盛んであった。米市は米廊下（俗に米棚下と呼ばれる）に、「乾隆以前此地米市最盛」であつて、道光以降、「米市移于西木行」である。これは南潯鎮の経済構造の新特質である。

この経済構造の中で蚕糸業は南潯鎮の経済は命脈である。嘉靖年間に徐猷忠は、
蚕桑莫盛于湖……。

蚕糸物業饒于薄海、他郡邑咸藉以畢用、而技巧之精、独出蘇杭之下……。
田中所入与桑蚕各具半年之資。

と述べる。それ故に明代以来、「湖糸遍天下」の諺語が広がってくる。⁽³⁰⁾

湖糸のうち輯里糸（俗に七里糸と呼ばれる）は非常に有名で、それは南潯鎮の西南七里の輯里村の産出物である。万曆時代に南潯人朱国禎は、

湖糸惟七里尤佳、較常価每両必多一分、用織帽緞、紫光可鑑。

と述べるように、輯里糸を原料とする絹織物はきれいである。隆慶・万曆以来、各地の客商は南潯鎮に集まり、輯里糸を買った。乾隆『湖州府志』は、

隆・万以来、機杼之家相沿此業、巧拙百出……各直省客商雲集貿販、里人買鬻他方、四時往来不絶。
と述べている。⁽³¹⁾

清代に、南潯鎮の蚕糸業は盛んになり、董蠡舟「南潯蚕桑樂府自序」は、
蚕事吾湖独盛、一郡之中尤以南潯為甲。

と述べる。『湖州府志』にも

其樹桑也、自牆下・簷隙以暨田之畔・池之上、雖農無棄地也。

尺寸之隄、必樹之桑。

窮鄉僻壤無地不桑。

と述べられている。⁽³²⁾ 農家は栽桑・養蚕だけでなく、みな家の中で糸を繰る。技術が高度なので、民間には「繰糸莫精于南潯人」の諺語がある。

清中葉、南潯人の糸市は非常に繁栄して、「商賈輻輳、而蘇杭兩織造皆至此收焉」⁽³⁴⁾である。董蠡舟「売糸詩序」によると、鎮南柵有地名糸行埭、列肆購糸、謂之糸行。商賈駢毗、貿糸者群趨焉、謂之新糸市。行有京莊・広莊・経莊・劃莊・郷

莊之分。

と述べられている。「売糸詩」にも、

閩閩填噫駟儂忙

一榜大書糸經行

就中分列京広莊

畢集南粵金陵商

と詠われ³⁵る。

糸市は客商を集めるだけでなく、糸を売る農家をも集める。温豊「南潯糸市行」に、「蚕事乍畢糸事起、郷農売糸争赴市、市中人塞不得行、千声万語聾人耳。紙牌高揭糸市塵、沿門挨戸相連接、喧嘩鼎沸辰至午、駢肩累跡不得前」と記されるように、牙儉の糸行は取引が盛んで、「列肆喧闐、衢路擁塞」であった。董恂「売糸詩」には、

初過小滿梅正黃 市頭糸肆咸開張

臨衢高揭紙一幅 大書京広糸經行

区区潯地雖偏小 客船大買來行商

郷人売糸別粗細 広莊不合還京莊

と述べ³⁶られている。

京莊は専ら蘇州や杭州の織造局に提供された。清代には、江寧・蘇州・杭州に織造局が設立され、太湖周辺地域の市鎮から糸を購入したので、南潯鎮は繁栄した大きい市場となっていたのである。

広莊は専ら広東商人、および「載往上海与夷商交易者」をもてなす。俗に客行と呼ばれる。

郷莊は郷糸市であり、専ら郷糸を買う牙行である。

経莊というのは専ら経糸を買い、経糸を作る牙行である。農家は経に自分の糸を紡いだから、経莊に売る。これは郷経と呼ばれる。農家は経に経行の糸を紡いだから、工価を受取る。これは料経と呼ばれる。経莊は蘇州の機戸に経糸を売ると、これを蘇経と呼ぶ。広東商人に売ると、広経と呼ばれる。

劃莊はすなわち小行であり、専ら郷農の糸を買つてから、大行に売る小さい牙行である。

五口通商以降、洋商が上海に集まり、湖糸は主な輸出品になった。湖糸が洋莊に売れることは南潯鎮がはじめてである。湖糸の輸出に関して、南潯鎮は主な集散地である。南潯鎮の湖糸輸出の交易状況について、温豊「南潯糸市行」は、

一日貿易数千里

市人誰不利薰心

但教炙手即可熱

街頭巷口共追尋

茶棚酒肆紛紛話

紛紛尽是買与売

小買収買交大買

大買載入申江界

申江鬼国正通商

繁華富麗厭蘇杭

番舶來銀百万計

中国商人皆若狂

と述べる。

湖糸の交易は南潯鎮の繁栄を支える重要な基盤であつた。南潯鎮は富庶の市鎮になり、民間の諺語には、

湖州整個城、不及南潯半個鎮。

とあり、南潯鎮の經濟的地位がうかがえる。

一八七〇年代より一九二〇年代に至る五十年間は南潯鎮の發展史の中で最後の黄金時代である。海外の市場は中国糸の需要量が急速に増加し、これによつて湖糸の生産が刺激された。南潯鎮の四郷は、「無不桑之鎮、無不桑之家」となり、「郷人費一月之功、苟得豊収、一年取給于此」であつた。南潯鎮には資金百万以上の糸商がたくさんあつた。俗に四象・八牯牛・七十二狗と呼ばれる。「四象」の資金はみな百万以上であつて、劉氏は二千万、張氏は一千二百万、邢氏は四百万、龐氏は百六十万あつた。

南潯鎮の鼎盛時代には、經濟繁栄だけでなく、文化も發達し、「人文蔚起」の地であつた。范来庚は、

数百年來、人文蔚起、闌闌紛屯、東西南北之通衢、周約十里、郁為巨鎮矣。

と述べる。范穎通が、

前明中葉、科第極盛、有「九里三閣老、十里兩尚書」之諺。

と述べるように、三閣老とは、すなわち南潯鎮東柵馬家港の朱国禎と南潯鎮の西七里の輯里村の温体仁、南潯鎮の西南十一里、馬要村の沈淮をさす。また「九里三閣老」は「七里三相国」とも呼ばれる。温棐忱の『七里村志』は、

有誇其先者、馬溪世家沈氏有相国焉、潯溪世家朱氏有相国焉、吾里之顯亦家相也（すなわち温体仁）。三相国相距凡七里、至今以為誦。

と述べる。いわゆる両尚書とはすなわち董份・沈演である。明代に、南潯鎮は進士七人、举人二十七人を出した。清代には進士十六人、举人五十人を輩出した。

南潯鎮は区域経済の高度成長に伴って、区域文化も非常に発達した。前述の「科第興旺」の事実はこの区域文化の産物である。民間の風俗と年中行事からもこの区域文化の様子がうかがえる。万曆時代の王道隆は、こう語る。

成化以前、謀饗飡者以興販為能、養子弟者以讀書為諱、譁者好勇而争訟、細民重積而信巫。今則市廛以質当相先、宴席以華侈相尚、擁資則富屋宅、買爵則盛輿服、鉦鼓鳴筋用為常樂、盖有僭踰之風焉。

清代に、この風俗は一層広がってきた。たとえば、正月十五日の元宵祭には、「鉦鼓之聲」が絶えず、元宵鼓と呼ばれた。街市に燈籠がたくさんあり、龍燈・象燈・獅燈・馬燈などがある。住民は燈を撃けて町中を遊びまわり、神を迎え、燈を見物する。これは出燈会と呼ばれる。張鎮の「潯溪漁唱」の詩には、

元宵風景儘堪誇

画鼓鞞鞞燈市譁

卮字欄干珠箔捲

争看水面放蓮花

と詠われている。

三月初三日、男女はみな苜蓿菜花を戴く。寒食祭には郷村で哨船を飾り、哨船に彩亭・旗幟を設けて、郷人が技芸をきそう。寒食から清明まで、小舟の競渡がある。俗に宜田蚕と呼ばれる。清明日、育蚕の家は「設祭以禳白虎」であつて、これは祛蚕崇と呼ばれる。

三月二十八日は東嶽の誕生日である。『南潯鎮志』が、

燒香作會、或誦經上壽、或枷鎖伏罪、扮搭台閣故事、迎演數日。

遇豐年則出燈會、每在二三月間、引線燈作繡球、涼傘等形、爭新鬥艷、為他處所無。擊鉦鼓隨之、游行市上、迎神出觀……旬余始罷、遠近來觀者甚衆。

と述べるように、孫燮「三月下旬燈事甚盛感而有作」詩には、

宝馬香車絡繹迎 笙歌如沸水如城

人情欲補元宵缺 天氣難逢穀雨晴

拳国若狂豪興在 非時為樂後憂生

依稀記得当年警 早閉閭門禁夜行

と詠われている。⁴⁸⁾

七月十五日は中元祭である。『南潯鎮志』には、「地官赦罪之辰、僧至錄亡者姓名、遍送檀越、謂之節閨。建盂蘭盆會、夜則放餞口、施食、沿河放燈、謂之照冥。市井醞資、各延僧設瑜伽餞口、街頭巷尾夜夜都有」と述べられている。⁴⁹⁾

そのほかに九月初五日は南潯鎮の土神崔李二承事の誕生日であり、鎮中には演劇し、遊人がたくさん集まり、一か月にわたって続けられる。

この文化風俗は鼎盛時代の南潯鎮の社会生活のそれぞれの側面を反映していたのである。

二 烏青鎮

湖州府烏程県の烏鎮と嘉興府桐鄉県の青鎮は、市河を境にして、当地人は慣習的に烏青鎮と呼んでいる。乾隆『烏程県志』は烏鎮と青鎮について次のように記している。

……戸口日繁、十里以内、民居相接、烟火万家、二鎮聯而為一、中以市河、道為界、因合呼烏青鎮。河東則仍屬桐鄉縣、為青鎮、河西則仍屬烏程、為烏鎮。二鎮之四柵八隅、則為江浙二省湖嘉蘇三府烏程・歸安・石門・桐鄉・秀水・吳江・

震沢七県錯壤地、百貨駢集。⁵⁰⁾

南宋嘉定年間に莫光朝の「徙役碑」には、

烏青鎮分湖秀間。

と述べられ、同時代の張備の『重修土地廟記』にも、

湖秀之間有鎮、画河為界、西曰烏鎮、東曰青鎮。

と述べられている。淳熙三年の万珪の「青鎮索度明王碑」にも、

秀之青墩与湖之烏墩二市、相抵為一鎮。

と述べられている。

宋から明まで、烏青鎮は興・衰・復興の三段階を経過し、この発展の過程について、嘉靖三年に当地人陳觀氏は次のように語る。

烏青鎮は淳熙・嘉定間に興り、徳祐二年に突如衰微し、「公署・酒樓・官店悉入為民廬」とあった。元初にまた漸次復興してきた。元末に兵燹に遭い、全鎮の建物が破壊された。「僅存者唯両浮屠之遺跡焉」であった。明初は、「民廬・寺觀雖云重興、亦不尽復」という状態であった。成化・弘治間に至り、

居民殷富、鋭于興作……荆棘蕪素無人居者、亦刪刈而結構之……（店舗・民居）鱗次櫛比、延接于四柵。

という情況になり、正徳、嘉靖間に至り、

負販之広、封桑之勤、又日盛一日。且士知問学、科貢有人、民知尚義、輸賑多室、縉紳士夫摩接街市、民風土俗一變而為富庶禮義矣。

という情況となった。

嘉靖十七年に、地方官は烏青鎮に県治を設立することを申請した。この「請分立県治疏」によって烏青鎮は盛んになったと見られる。「請分立県治疏」は烏青鎮について次のように述べている。

地僻人稠、商賈四集、財賦所出甲于一郡……烏程・帰安・桐郷・秀水・崇徳・呉江等六県輻輳、四通八達之地……本鎮地厚土地沃、風氣凝結、居民不下四五千家、叢塔宮觀周布森列、橋梁闌闌、不煩改拓、宛然府城氣象。

「宛然府城氣象」の言葉は、烏青鎮の規模の宏大さをはっきりと示した。

嘉靖・万曆時代には、烏青鎮は農桑が発達し、交通が便利なため、商賈が集聚する住民万戸の大鎮になり、俗に隔府・隔

省の大鎮と呼ばれた。万暦年間に推官張応雷は次のように記している。

窃照烏青地方乃浙（江）、直（隸）之交、湖州之烏程、嘉興之桐鄉、蘇州之吳江三邑相連、本鎮居民近万。⁵⁵

清初、烏青鎮は蚕糸業の急速な発達に伴って、ますます盛んになり、市鎮の規模が拡大した。烏鎮は縦七里、横四里あり、青鎮は縦七里、横二里あり、また東・西・南・北に四つの門があった。

南昌門——青鎮の南門、杭州に通じる。

澄江門——烏鎮の北門、蘇州に通じる。

朝宗門——青鎮の東門、嘉興に通じる。

通霄門——烏鎮の西門、湖州に通じる。

この四つの門は、「以郡城規模名之」であつた。⁵⁶ 実際には、烏青鎮の規模は府城を凌いだ。乾隆『烏青鎮志』は、巨麗甲他鎮、市達広袤十八里。

と述べる。⁵⁷ これに比して湖州府城や嘉興府城の規模は十二里に過ぎなかつた。⁵⁸

烏青鎮には街道がたくさんあり、烏鎮の南門から北門まで大街に沿って、小街十六條があり、青鎮の南門から北門まで小街十三條があり、烏鎮の西街の安利橋から西門まで小街十三條があり、青鎮の東街に沿って小街が五條ある。それ故『烏青鎮志』は「名爲鎮而実具郡邑之勢」と述べている。⁵⁹

清末の烏青鎮の市街を列挙すると、次の如くである。

常春里大街——嵇家江から安利橋まで、衆安橋の北で旅舎の集聚の地であるので、夜市は盛んである。

澄江里大街——南は安利橋に至り、北は飛蓋橋に至る。利濟橋辺りに市集がある。

通霄里大街——東は安利橋に至り、西は通濟橋に至る。利濟橋の辺りに市集があり、治房橋の辺りではかなりの熱鬧であつた。

以上の大街は烏鎮に属隸する。

南大街——南は茶亭に至り、北は常木橋に至る。『烏青鎮志』は、

南北市廛相接、浮欄橋以南俗称橋外頭、為郷民市易之区、糸莊・棧行（米穀牙行）均設于此。濟遠橋至常豊橋為中市、

繁盛之地、江源典及阮恒德藥号・宜昌綢莊各大商店皆在此。

と述べる。⁶⁰

中大街——常豊橋から蓆行橋までである。『烏青鎮志』は

此街為兩鎮上緊之地、其大商店如雲錦綢莊・久大參行、著名菜館九江樓在興德橋南。

と述べる。⁶¹

北大街——蓆行橋から油車漕までである。普濟橋辺りに市集がある。

觀前街——常豊橋北塊から望佛橋までである。中大街に連接し、商業が繁栄していた。

東大街——住宅区であり、財神湾には市集があった。

以上の大街は青鎮に属隸する。

そのほか、柁家漕は南柵の繁盛地である。西長明巷は俗に焼茅場と呼ばれ、毎年の清明祭に、香船がここに停泊し、市集をなした。寺後巷は八鮮行がある。毎朝に市場をなしている。

民国初年、烏青鎮は七鎮になった。すなわち澄江鎮・通霄鎮・通津鎮・常春鎮・青南鎮・青北鎮・青東鎮である。⁶²このことよつて、烏青鎮は經濟の發達と規模の宏大さがかがえる。

烏青鎮の交通は便利であり、四通八達の水路に沿つて、鎮の南柵より出發して、

東へ十五里、爐頭鎮に至り、

東へ十八里、皂林鎮に至り、

東へ三十六里、陡門鎮に至る。陡門より南へ四十六里、濮院鎮に至る。

西へ十八里、璉市鎮に至り、

西へ五十四里、新市鎮に至る。

鎮の北柵より出發したら、

東へ六里、六里壩に至り、

東へ九里、九里橋に至り、

東より北へ十里、嚴墓市に至り、
東へ四十九里、檀丘市に至り、
東へ七十二里、平望鎮に至り、
東へ三十里、新城鎮に至り、
東へ九十二里、王江涇鎮に至り、
西へ三十六里、南潯鎮に至り、
西へ五十四里、震沢鎮に至る。⁶⁹

明清時代に烏青鎮の水運は、民国『烏青鎮志』によると、その一斑が知られる。木製の快船は一般に日に一便、或いは二日に一便あり、日に二便の場合もある。この水運航路は十四條ある。たとえば、

- (1) 王店船——烏鎮より濮院鎮に至る。碼頭（波止場）は印家橋塊にある。日に一便がある。
- (2) 湖州船——烏鎮より馬腰鎮に至る。碼頭は印家橋塊にある。日に一便がある。
- (3) 震沢船——烏鎮より嚴墓鎮に至る。碼頭は二井橋にある。日に一便がある。
- (4) 湖州船——烏鎮より双林鎮を經由して練市鎮に至る。碼頭は二井橋にある。日に一便がある。
- (5) 嘉興船——烏青鎮より新塍鎮を經由して練市鎮に至る。碼頭は二井橋にある。日に一便がある。
- (6) 塘棲船——烏鎮より新市鎮を經由して練市鎮に至る。碼頭は二井橋にある。日に一便がある。
- (7) 南潯船——烏鎮より爐頭鎮・桐郷県・屠甸鎮を經由して硤石鎮に至る。碼頭は宮橋北にある。日に往復二便がある。
- (8) 長安船——南潯より烏鎮、爐頭鎮・石灣鎮を經由して崇徳県に至る。日に往復二便がある。
- (9) 桐郷船——烏鎮より爐頭鎮に至る。碼頭は浮欄橋塊にある。日に往復二便がある。
- (10) 崇徳船——烏鎮より石灣鎮に至る。碼頭は浮欄橋塊にある。日に往復二便がある。
- (11) 硤石船——烏鎮より爐頭鎮・桐郷県を經由して屠甸鎮に至る。碼頭は二井橋にある。二日間に一便がある。
- (12) 善練船——烏鎮より練市鎮に至る。碼頭は二井橋にある。日に一便がある。
- (13) 濮院船——烏鎮より石谷廟に至る。碼頭は印家橋塊にある。日に一便がある。

(14)湖州船——烏鎮より馬腰鎮に至る。碼頭は二井橋にある。日に一便がある。⁶⁴

そのほか、品物を運搬する航路もある。このように烏青鎮には百船が会聚し、万商が雲集し、数百年にわたって商業中心の地位を持ち続けた。

烏青鎮の主な産業は蚕桑業である。四郷の農家は蚕桑を主業とする。謝肇淛の『西吳枝乘』は、
其生計所資視田幾過之、且為時促、而用力倍勞。

と述べる。徐猷忠は、

蚕桑之利莫甚于湖、大約良地一畝可得葉八十個（每二十斤為一個）、計其一歲墾鋤壅培之費、大約不過二兩、而其利倍之。⁶⁵

と述べる。

桑葉の交易は烏青鎮の重要な商業部門であるので、鎮の四柵にはみな青桑葉行（すなわち桑葉牙行）を設置した。立夏の後三日に、農家は桑葉を採摘し、船で鎮に運搬し、青桑葉行に売る。これは葉市である。新葉上市のときに、鎮中で葉市が盛んになる。董蠡舟の「樂府小序」は、

葉莫盛于石門・桐郷、其牙儉則集于烏鎮、買葉者以舟往、謂之開葉船。饒裕者亦稍以射利、謂之作葉、又曰頓葉。

と述べる。こうして烏青鎮は周辺地区の桑葉の集散地となった。毎年の立夏に、南潯・震沢などの地方の蚕戶はここで桑葉を買い、交易の桑葉は十万担ぐらいある。葉市は頭市・中市・末市があり、毎市が三日続く。桑葉の価格は朝市・晩市・夜市それぞれ違う。『烏青鎮志』に、

葉行上市通宵達旦、采葉船封滿河港。葉行營業順利、驟可利市三倍。

と記される。「四月黄金隨地滾」という諺語もある。⁶⁷

烏青鎮では蚕糸を以て名高く、糸市も盛んである。四郷の蚕糸は西郷の輯里糸が最も優れていた。小滴に至る新糸上市のときには、鎮中の糸行はとて繁盛した。『烏青文獻』は、

各處大郡商客投行收買。

平時則有震沢・盛沢・双林等鎮各處機戶零買經緯自織。……（販子）貿糸詣各鎮、売于機戶。

と述べる。⁽⁶⁸⁾ 清末、鎮中の糸行は沢山現われ、鎮の南柵には丁同和号・胡同順号・荣盛号・姚德泰号・仁記があり、東柵に周恒源号・楊義豊号・錢天元号・德泰興記があり、西柵に邱恒茂号があり、北柵に徐興道号がある。

烏青鎮の四郷では棉花を産出しないが、農家の婦女は皆布を織る。崇禎『烏程県志』には、「(烏鎮) 其の市は布を産出し、甚だ繁盛している」、「木棉布は烏で生産されるものの品質が佳い」と記される。⁽⁶⁹⁾ このことから、明代には烏青鎮に、布織業が興って、優れた品質の棉布を産出したことがわかる。『烏青文獻』は、

閩広人獨喜本鎮之布、以其輕軟而暖也。布有大小輕重、価亦多寡不同。

と述べる。⁽⁷⁰⁾ 清代において烏青鎮の四郷の布織業が発達し、農家で棉布を産出し、鎮内の布莊に売っていた。民国の『烏青鎮志』は、

商人設莊收買、行銷于外埠、布莊有沈永利・沈義和・顧周昌・胡允和四家、營業甚為發達。

と述べる。

要するに、烏青鎮は四郷農家経営の商品代生産に伴って、商業を中心とする市場町の機能をはつきり示し、市場経済中に蚕桑、繰糸紡織などの産業を捲き込んでいた。それ故、商業資本、高利貸資本は生産過程と生活のそれぞれの分野に浸透していた。次にその表現形式を列挙してみたい。

(1) 「凡蕃蚕者、或自家蚕桑不足、則預定別姓之桑、謂之稍葉」⁽⁷¹⁾とあり、そのうち「除稍」なるものがあり、收繭の後に葉価を支払い、価格は現稍より25%高い。⁽⁷²⁾

(2) 稻穀を收穫したあとに、農家は典鋪に米穀を典当し、銀錢を受けとる。俗に「投典賤質」「希貿易博利」と呼ばれる。⁽⁷³⁾

(3) 春夏の際には「青黄不接」の時期のため、農家は富室から米穀を借りて、これを生米と呼ばれる。そのほかに「或有他方商客投牙放米、謂之牙賬」⁽⁷⁴⁾があった。

(4) 烏鎮の殷富の家は「例子蚕畢收賬」であるから、農家は「收穫之際公私償債」⁽⁷⁵⁾であった。

商業資本と高利貸資本は農家経営のそれぞれの段階に浸透した。『烏青文獻』卷三農桑には、

貸米以延須臾之死、質糶以作不急之務……其後貿易折閱、息利倍加、自此逋負益積、逃亡隨之。

と述べられているように、典当業が盛んになった。「汗出頼頼、強如做債」の諺があった。民国『烏青鎮志』は

両鎮典業在商業極盛之時、相伝有十三家之多。

と記している。²⁶⁾

烏青鎮は経済の中心地としてだけでなく、名門望族の集聚の所でもあった。宋室南渡のあとに、士大夫はここへ徙居してきてから、園林、宅第を建築し、「聚族而居」の状況であつて、名門望族を形成した。『烏青文獻』は、

宋南遷、簪履盛、冠裳之会如朝聘、鳳仙陳跡已湮没、龍種淵源乃著姓。

と述べる。²⁷⁾ 乾隆『烏青鎮志』も、

青鎮与湖郡所轄之烏鎮夾溪相对、民物蕃阜、第宅園池盛于他鎮。宋南渡後士大夫多卜居其地……幅員四達、文人日起、甲于一邑。

と述べる。²⁸⁾

烏青鎮及びその四郷の名門望族は、次に列举するように多く居住していた。

(1) 陋巷村に顔氏がおり、建炎初に扈駕を以て南渡し、はじめに石門鎮に居った。明末にここへ徙居した。康熙年間、陋巷村の顔氏は非常に有名であつたために、村の名を顔家村と呼ばれるようになった。

(2) 華林村の茅氏は、山陰よりここへ徙居した。明代に益々顕赫となり、湖州の大家となった。嘉靖年間、茅坤は進士になった。茅坤は字順甫、号鹿門。論著に『白華楼藏稿』や『玉芝山房稿』などがある。その子茅維は字孝若であり、臧懋循・呉稼澄・呉夢暘とともに四子と呼ばれた。

(3) 楊園村張氏。張履祥がおる。楊園先生と呼ばれ、論著には『楊園先生文集』がある。

(4) 外河村沈氏。沈振龍がおる。万曆進士であり、その曾孫適文は康熙間に狀元となった。

(5) 鎮中に夏氏。夏燠、夏煒がおる、みな万曆の進士である。

三 菱湖鎮

菱湖鎮とは帰安県治の南四十里にあり、唐宝曆年間、刺史崔元亮は波塘を浚い、ここで菱を産出したので、菱湖と呼ばれる。住民ははじめに塘東に住宅を建てていた。明龐太元『菱湖志』は、

菱湖非舟車孔道、汪洋浩渺、古未成聚。自築浚波塘以後、民始聚廬于塘之東、興菱桑業、塘以西皆桑墟

と述べる。南宋に、菱湖付近に市廛が興り、橋梁が造られて、人煙は漸次多く集まつてきた。元の末に、兵火に遭って、市廛は毀たれた。明代の洪武初年に初めて務司が設けられ社壇が建てられた。商業は東湖において盛んであった。そのときに、菱湖は市から鎮となった。このことについて、孫宗承「菱湖紀事詩」に、

東溪成聚倍其余

北与西南遂徙居

撲地人煙舟絡繹

の応改鎮在明初

と詠われている。菱湖鎮の成立は明初である。成化、弘治年間、居民は始めて西湖に徙り、『婦安県志』に、

第宅連雲、湖東西無隙地。

と述べられているように、正徳・隆慶・万暦年間、菱湖鎮は迅捷に繁栄してきた。『菱湖鎮志』には、

第宅連雲、闌闌列螺、舟航集鱗、桑麻環野、西湖之上無隙地、無剩水矣、遂為婦安雄鎮。

と記されている。菱湖鎮は東・西・南・北に四柵がある。長さは二里あり、広さは四里ある。鎮の中では商業が繁栄する。

嘉靖年間に孫銓は次のように語っている。

沿湖岸鋪及湖内舟船、商賈湊集、総之各行不下百余戶。

鎮の中では衣裳巷や棉綢巷は賑やかな商業区である。そのほかに車潭街や染店浜街・凌木行口には商店・作坊が多かった。万暦四十一年、王繼祀「重修永寧禪院碑記」は菱湖鎮の盛況を次のように描写している。

菱湖為東南巨都、數百年來文章冠冕鼎踵起、其騷人墨士握管生花、染翰成霧、即一切游閒豪俠、擊築彈糸、鬪鷄走狗

……靡不各極其工。而又四方舟航所湊、水陸奇深、異寶百物所環、廛市之徒摩肩輻輳……盖他境繁華所罕与儔。

このように万暦時代の盛況が菱湖鎮と詠われる詩の中に反映しており、万暦『婦安県志』には、

魚廛糸市鬧通衢

僻壤今成貢賦区

南院鐘声伝北院

西湖水勢入東湖

と詠われ、また「夜市燈光匹練拖」と述べている。⁸⁶

清初以降、菱湖鎮はますます繁栄し、科第が前明と比べて、一層甚しくなり、商人が集聚し、糸業が帰安県の第一位になり、帰安県がここに主簿を設け、鎮の住民は五千余戸にのぼった。⁸⁷

菱湖鎮は沢国水郷と呼ばれ、鎮の周辺をめぐる河川が多くあって、鎮中に市河があるから、船舶の往来には非常に便利なので、河川中に取引する水市は盛んになる。「茗紀」は、

菱湖人居舟中、列諸貨市之、謂之水市。

と述べ、康熙『帰安県志』も、

菱湖為百貨所集、作水市。

と述べる。水市は菱湖鎮の特色である。明趙金「過菱湖詩」には、

去去余不路 遨遊一問津

村墟船作市 地絶水為鄰

菱藕官租足 魚蝦野饌新

衆山遙映帶 相對碧嶙峋

と詠われるように、船舶と商業との関係は深く、市戸が租を収める船は賬船と呼ばれ、貨物をはこぶ船は装船と呼ばれ、蚕糸をはこぶ船は糸船と呼ばれ、旅客をはこぶ船は航船と呼ばれていた。⁸⁸

菱湖鎮の四郷の蚕桑経営の活性化が菱湖鎮の繁栄を支える重要な基盤であった。農家は蚕桑を生業として、「公家賦税、吉凶禮節、親党酬酢、老幼衣著、唯蚕是頼」、「豊収三五載詠可小康」であった。帰安県は「諸郷統力農修蚕績」、「菱湖業蚕撚綿為綱尤工」であった。⁸⁹

湖州の糸・網は全国によく知れわたり、そして菱湖で生産される糸・網は湖州各地の首位を占めた。万曆『湖州府志』は、糸有合羅糸・串伍糸・経緯糸、属県俱有、惟出于菱湖洛舍者第一。

網有水綢、有紡糸綢、出菱湖者最佳。

と述べている。⁹¹⁾

小満のあとに、新糸市がある。この新糸市は盛んであつて、いわゆる「列肆喧闐、衢路擁塞」であつた。「茗記」には、菱湖多出蚕糸、貿易者倍他處、盖由来久矣。

と記される。菱湖の周辺三十里の農村で生産される蚕糸は全部が菱湖鎮に集荷され、農家は糸船で鎮中に糸を運び、牙行に売る。牙行は河川の岸に臨み、糸を受取る。四、五月の間に、「郷人貨糸船排比而泊」となり、取引きは非常に繁忙である。⁹²⁾ 蚕糸牙行は大行、小行があり、小行はまた鈔莊・小領頭があつた。「茗記」は、

其小行買之以餉大行及買糸客人者、日鈔莊。更有招郷糸代為之售、稍抽微利、日小領頭、俗呼白拉主人。鎮人大半衣食于此。

と述べる。菱湖鎮の糸は全国市場に向けて、出荷される数量が多く、毎年一万包（每包が六十斤ある）ぐらいであり、湖州府の第一位であつた。⁹⁴⁾

市鎮經濟の繁榮に伴つて、市鎮文化も繁榮していた。当地の人氏は次のように語っている。

国朝科第更盛于前明。

宋代に進士一人が出た。明代には進士八人がいた。清代には進士が三十四人いた。⁹⁵⁾ とりわけ乾隆時代には、菱湖鎮は十七人の進士があり、その極盛時代であつた。卞斌「募建龍湖書院啓」には一門二及第と一門三同科の盛況について、

一門上第榜花有大小之稱、康熙時孫在豐殿試一甲第二、從子孫見龍會試第一、乾隆時編修孫辰東起而兼之、人曰侍郎為老榜眼、編修為小榜眼。

其郷試同科者、康熙五十三年吳氏延照、兆麟・応薰三人、雍正十年吳氏深・訥・錦三人、十三年吳氏龍光・熊光二人、朱氏棟・更二人、乾隆元年孫氏汝馨・鄂・荐岐三人、二十五年孫氏凌雲・辰東・級三人、五十七年孫氏倬・憲緒二人、六十年孫氏樹楷・征槐二人

と述べるように、菱湖鎮はまさに「人文荟萃の地」であつた。

四 双林鎮

歸安県治の東南六十里にある双林鎮は、北宋に東林鎮と呼ばれた。南宋時代に商賈の集聚地になり、商林と呼ばれた。元代に商林鎮中に絹莊が十ヶ所あり、普光橋の東辺に糸・絹を取引した。明代のはじめに、商林の東部すなわち東林は、しだいに衰微し、商林の西部すなわち西林は漸次盛んになってきた。永樂三年、西林村は双林鎮と呼ばれ、東林鎮は東林市と呼ばれた。なお東林市は「街途寛衍、不異城郊」であった。

明初、双林鎮の戸口は少なく、数百家、千余人ぐらいであった。成化年間にかけて、戸口は急速に増加し、明初の二倍ぐらゐになった。崇禎年間に、三千戸、一万六千口ぐらゐあった。清初には「里民日集、僑民日増」であり、三千四百戸、二万一千口ぐらゐになった。嘉慶から咸豊までは双林鎮の鼎盛の時代であった。『双林鎮志』には、
尤稱富庶、科甲振興、名宦名儒輩出。

と述べられているように、全鎮の住民は万戸ぐらゐであった。咸豊十年、十一年、兵火に遭つて、鎮中の建物は「遭毀過半」であり、「集存戸不及四千」となった。しかし同治・光緒年間にはしだいに恢復し、双林鎮は再び繁栄を始めた。

『双林鎮志』は、

亭台相望、殿宇嵯峨、津梁幾百十帶、居人三四千戸、高門鱗次、甲第雲連。

と述べている。

双林鎮中には二つの川が流れている。一つは北から西南へ、一つは東から西南へ、丁字形に交叉し、嘉興より湖州に至る捷徑になる。全鎮は東から西まで長さが四里あり、南から北まで広さが三里ある。また七街があつて、十五巷があり、四十三弄（すなわち術）がある。そのうちおもなものは、次に列挙してみることにする。

上横街——鎮の中心部にあり、東から西まで鎮中を横たわつて、東は便民橋を通じて、西は薛家漚に通じる。この街は商人が集聚する所で、街中に商店が多く並んでいる。そのうち衣莊は清初に七十余家あり、乾隆のときには四十余家あつた。

下横街——上横街の向こう側にある。街中に酒店がたくさんあるので、遊人が集衆する所で、「日夕喧闐」であつて、俗に小蘇州と呼ばれていた。新公館前で、毎日午前中に、各絹莊はここで郷民の絹匹を取引していた。

新開巷——新絹巷とも呼ばれた。崇禎年間、沈孝廉はここに市廛をきざいたあと、絹の取引所となった。

旧絹巷——明代の絹取引所であり、すなわち絹市であつて、估客はここで絹を買った。明末清初、絹市は鎮の東部（すなわち新絹巷）へ移つてから、旧絹巷と呼ばれた。

老絹巷——郷民が絹を売る所であつた。

双林鎮は著名な包頭絹（あるいは包頭紗と呼ばれる）の産地である。包頭絹は婦女の頭巾の原料になつてから、広く各地に流通し、当時「通行天下」であつた。『双林鎮志』は、

閩俗有男亦用裹首。惟北地秋冬風高沙起、行者紗罩面護目。

と述べる。明代成化年間以降、双林鎮辺の農家はすべて絹を織ることに熟練し、農家で生産される絹は素晴しかつた。ここで絹を買う商人は絶えなかつた。鎮の中心部の市河をまたぎ越える化成橋の辺りは包頭絹の集散地であり、船舶が昼夜なく往来した。成化十一年、張廉の『重建化成橋碑銘』には、

溪左右延袤数十里、俗皆織絹、于是四方之商賈咸集以貿易焉。溪実為嘉湖往来捷徑。と記される。

隆慶、万曆以降、双林鎮の絹織物業は一層盛んになつた。『双林志』が、

隆・万以来、機杼之家相沿此業、巧变百出・有綾有羅・有花紗・縐紗・斗縐之縠、有花有素、有重至十五六兩、有輕至二三兩、有連為數丈、有開為十方、每方有三尺・四尺・五尺、長至七八尺、其花樣有四季花・西湖景緻・百子図・八宝龍鳳、大小疎密不等。

と述べるように、双林の絹織物は湖州糸絹の高級品となり、各地の客商は争つて販売したのである。『双林志』は、各直省客商雲集貿販、里人買鬻他方、四時往来不絶。

と述べる。この繁栄の状態は清代中葉にまでつづき、長期間に涉つて繁栄した。

双林鎮の四郷は、農家が商品化経営を行い、商業的な農業が盛んであつた。農家はすべて桑を栽培し、蚕を養し、当時の人は次のように語つてゐる。

吳興蚕桑甲天下、東林又甲于吳興。

(農家) 好稼穡、尤精治桑、桑之利倍收于田、以故家益饒。

四郷農家は、また糸を繰り、絹を絹る。四郷の水質が清冽であつたから、「郷人取以練糸、洁潤異常」であつた。それ故双林鎮周辺の数十里間の農家はすべて絹を織り、そのうち織旋漾・紗機塚などの村莊は機戸を多くかかえていた。『双林鎮志』には、

織旋漾村——紡織家環聚其中

紗機塚村——明初織紗機者聚此

と記されるように、双林鎮近辺の村莊はすべて絹織物業を生業として、男子はあるいは線を絞り、あるいは鎮市に至つて糸を買い、絹を売つた。絹織物業の経済収益は農業の経済収益より大きいために、農家はすべて農業を軽視している。『双林鎮志』は、

近鎮數村以織絹為業、男子或従事絞線、必常出市買糸売絹、田功半荒、而衣帛食鮮醉飽市肆、其逸樂遠勝常農。

と述べる。農家は「以織絹為上」であつて、すなわち絹を織ることを生業としていたので経済収益が多く、そのため、「機聲鴉軋曉夜不休」であつた。農村の経済構造は新しい変化を現出した。

農村の絹織業は農家の主業になり、昔主業であつた農業は副業になつた。農家は田地を累贅と視したのである。当地の人は次のように語っている。

近村織絹、郷人賺錢甚易……此等村落田地不足貴。若田属鎮人、由佃納租、每得不償失……所謂「田為累字頭」也。

このように農村絹織物業の主業化が双林鎮の絹織物業の繁栄を支える重要な基盤であつた。農村で生産される絹織物は双林鎮に集荷され、加工されたあとに、全国市場に向けて出荷された。輸出する絹織物は包頭絹と包頭縲である。包頭縲のうち軽いものは海丈と呼ばれ、重いものは狭貢と呼ばれる。包頭縲は明天啓時代に興り、清代道光以後に、杭州の機坊でも包頭縲を織るようになった。しかし双林の包頭縲は杭州の包頭縲より高度の製品であつた。

絹織物業を生業とした本鎮人及び近村郷人は、あるいは自家で蚕を養い、自家で絹を織り、あるいは鎮市で原料(すなわち繭糸)を買つてから、絹を織つていた。

このことについて地方志は、

有往嘉興曹王附近買繭繅糸者。

(有往烏青鎮) 零買經緯自織者。

と述べる。本鎮の專業機戸はみな商人に代わつて絹を織つて、加工賃を取つた。このような商人は莊家と呼ばれ、彼らは機戸に糸を賒し、「即収其絹、以侷重利」であつた。このような莊家を機戸との關係は、雇傭關係であつた。

本鎮の人及び近村郷人によつて生産される絹は、牙行に売られる。姚典簿の『毅庵日記』は、

凡収絹、黎明入市、曰上莊、辰刻散市、曰収莊。

主其事者有司歲・司月、皆衣冠揖讓、權輕重美惡以定價、無參差、無喧嘩。故取絹者曰絹主、售絹者曰機戸、小絹主則惟引遠近各鄉機戸為牙耳。

と述べる。牙行は絹を収めてから、加工しなければならぬ。この加工は染皂と呼ばれる工芸の順序は、先に煮て後に漂白してから再び麻粉を塗りつけて、砧石に搗き、帑布に抹る。鎮中には絹を加工する皂坊・黒坊・膠坊などの作坊がたくさんあつた。

皂坊は、専ら皂色の絹を染め、坊中には灶・場・架があり、数百の雇傭労働者がいたのである。

黒坊は、専ら綾裱・包頭紗を染めていた。

膠坊は、専ら五色裱綾を染めていた。

皂坊の規模はとても大きく、雇傭工作の人が数百名ぐらいおり、外地の客商も鎮に皂坊を設立した。絹綾を加工してから、各地の市場に向けて出荷した。『双林鎮志』は、

嘉・道年間、涇県人在鎮開設皂坊、專利綾絹、運銷江寧・徽・寧等處、人数頗衆、營業極盛。と記している。

双林鎮は全国市場に向け出荷される絹織物の取引の中心地であつて、出荷される絹織物は綿綢・綾縞包頭紗・裱綾裱絹などがあつた。『双林鎮志』は、

綿綢——清同光間歲可銷三万匹。

綾縞包頭紗——量輕者曰海丈、銷福建及温台等處。沿海舟人用以裹頭、盛時銷量十余万匹。量重者曰狹貢・頂貢、婦女

以之包頭、江浙等處習用之、盛時所銷歲值十萬元。

綾綉綉絹——僅本鎮一處出之、行銷各省、且達日本……業此者設分莊于上海・蘇州、銷路乃更發達、歲值約十餘萬元と記している。

蚕糸の貿易は双林鎮の綾絹の貿易に次ぐ産業である。康熙時代の唐甄氏はこう語る。

吳糸衣天下、聚于双林……吳越閩番至于海島、皆來市焉、五月裝銀而至、委積如瓦礫。吳南諸鄉歲有百十萬之益、是以雖賦重困窮、民未至于空虛、室廬舟楫之繁庶勝于他所、此蚕之厚利也。

このため双林鎮と南潯鎮とが相い並ぶ湖糸（すなわち吳糸）の集散地となつて、交易は盛んであり、利益が非常に大きかつた。それ故、「精其業者、即空手入市、亦日有所獲」、「俗所謂早晨沒飯吃、晚上有馬騎」とされてい

各地の糸商を招きもてなす双林鎮の牙行は広行・客行と呼ばれる。それは鎮の四柵に分かれて居住していたからである。小満のあとに、閩広商人は行に投宿して糸を買う。頭蚕糸市と二蚕糸市が大市であつて、毎日の交易额は銀万両程あり、俗に「日出万金」といわれた。中秋のあと、客商は少なく、夥友は散らばつた。俗に冷糸市といわれる。零細な交易であつたが、来年の新糸市につらなつていた。このため諺語は「買不尽湖糸」とい

大市に逢うたびに、行家（すなわち行）は郷村にきて糸を買う。これを出郷と呼ばれた。鎮中では、また行家に代わつて糸を買うものがあり、抄莊と呼ばれる。また糸を買つてから牙行に売るものがあり、撥莊あるいは販子と呼ばれる。また撥莊に代わつて郷貨を買つてから行家に売るものがあり、撐旱船と呼ばれた。また平日に零細な機戸に売るものがあり、折糸莊と呼ばれた。また新糸上市のときに糸を買つてから積み集めて、待機に売却したものがあり、揀先土客と呼ばれた。蚕糸の交易は双林鎮の重要な産業になつたため、『双林鎮志』に、

貿易之人衣食于此者十居其五。

と述べられているように、蚕糸の交易が盛んになつたことが分かる。

十九世紀中葉以降、双林鎮の蚕糸交易はなお盛んであつた。まず肥糸の交易について述べたい。肥糸はまた粗糸と呼ばれ、縞を織る糸で、そのうち細いものは盛沢鎮辺りに売つて、粗いものは濮院鎮辺りに売る。咸豊・同治年間、客商は鎮に来て、「坐莊抄糸」の方式で糸を買つた。しかしその時の交易额は多くなかつた。光緒年間、協源肥糸行が設けられてから、肥糸

の交易額は急速に増加し、『双林鎮志』は、

四出兜銷、糸業逐年而盛、乃兼并鄰近市鎮所出合双林、其綵數可達千担。

と述べる。次に、白糸の交易について触れたい。白糸は出口糸で、双林鎮の東北郷の丁涇・西陽・邢村・邢審などの村落に産出する。農家の繰糸技術が高度なため、洋莊白糸はすべて輯里糸と呼ばれる。道光・咸豐の間に商人は香港にも売り出した。蔡興源糸行・陳義昌糸行はそのため興り、「積資巨万」となった。その後、白糸交易を經營する糸行はしだいに増加し、頭号白糸を選んで、上海に運搬し、洋行に売り、毎年三千余担を輸出した。

双林鎮は絹織物と蚕糸の取引市場として、各地の客商を集聚した。商人の団体として公館・会館・公所が設けられた。たとえば、次の例がある。

新公館——雍正四年、それぞれの絹行が連合して、新絹巷に建てた。ここは絹の取引市場で、絹行（莊）は毎日午前中に郷人の絹を買った。毎年九月十二・十三日、絹行商人はここに集聚し、演劇などの活動が行われた。

旧公館——康熙年間に、寧国府涇県の商人が建てたのである。涇県会館とも呼ばれた。

涇県会館——嘉慶・道光年間、涇県商人が双林鎮に綾絹を加工する皂坊を設けた。江寧・徽州・寧国などの地方に向けて出荷され、交易が盛んになってから、連合で会館を建てた。

崇義堂糸絹公所——咸豐年間、新公館の絹業公所が兵火に遭ったため、光緒二十八年絹業董事沈氏などの商人が粗糸・折糸両業商人と連合して建てた。

新安義園——乾隆年間、徽商十六人は土地を買って、楼を造り、「凡徽州六県之商人客死者、皆得入殯」であった。

そのほか、また金陵会館や寧紹会館・米業公所・菓業公所などがあった。このような公所・会館は双林鎮が各地からの客商によって繁栄していたことを反映している。双林鎮絹・糸の交易の盛んな姿をも反映している。双林鎮には、絹を織るもの、糸を操るものが数千人おり、絹糸の交易を生業とした客行・絹莊・撥莊・折糸莊・揀首などの商人は、全鎮の人口の二分の一を占めていた。即ち『双林鎮志』は、

土客総計之、吾鎮貿易之人衣食于此者、十居五焉。

と述べている。

双林鎮は商人の集聚の地だけでなく、士子文人の集聚の地でもあった。鎮中の教育・文化事業は発達し、住民は「亦農亦儒」・「亦商亦儒」を家訓として、明清兩代に科第事業は盛んになって、進士二十二二人、举人九十三人を輩出した。当地の人は次のように語っている。

四方賢大夫、選勝蹈奇者、咸聖于此。

(双林鎮) 愈極繁華、甲第連雲。

即ち双林鎮は文化の中心地でもあった。

おわりに

湖州府の四大市鎮の実態分析によって、江南市鎮は明清時代に重要な地位を持っていたことがわかった。その規模や繁栄、或は経済、文化はすべて県城あるいは府城を超越していた。「湖州整個城、不及南潯半個鎮」の諺語はこのことを反映している。

江南市鎮の取引市場としての地位は地区市場ではなく、全国市場の一部であり、その商品は全国各地の市場に向けて出荷されていたため、全国に対する糸・絹の生産と交易の中心地であった。

江南市鎮の鼎盛時代は、明中葉から清中葉までであり、市鎮の繁栄を支える重要な基盤は、農村経済の商品化生産にあった。近代以降、農村経済の商品化は、阻礙に遭ったため、市鎮の繁栄を支える重要な経済基盤が漸次に消失した。江南市鎮の重要な地位もしだいに低下したといえる。

註

(1) 高斯得『恥堂存稿』卷五「寧国府勸農文」に、「上田一畝、収五六石。故諺曰「蘇湖熟、天下足」……。」とある。また、范成大『吳郡志』卷五十雜志。

(2) 嘉泰『吳興志』卷十管鎮。

(3) 万曆『湖州府志』卷三鄉鎮。嘉靖『武康縣志』卷三山川志・墟市。

(4) 光緒『歸安縣志』卷六輿地志・区域村鎮。

- (5) 道光『南潯鎮志』卷首凡例。
- (6) 陳基『夷白齋稿』卷四下塘道中。
- (7) 咸豐『南潯鎮志』卷二十七碑刻三、無名氏「南潯重修城記」。
- (8) 咸豐『南潯鎮志』卷四衢巷。
- (9) 同上書。
- (10) 咸豐『南潯鎮志』卷五橋梁。
- (11) 咸豐『南潯鎮志』卷六古蹟、朱國禎「修東塘記」。
- (12) 咸豐『南潯鎮志』卷六古蹟。
- (13) 乾隆『烏程縣志』卷十一鄉鎮。乾隆『湖州府志』卷十五村鎮。
- (14) 道光『南潯鎮志』卷首、范來庚叙。
- (15) 咸豐『南潯鎮志』卷一疆域、卷十一農桑。
- (16) 民国『南潯志』卷一疆域。
- (17) 『中國經濟志』浙江吳興長興分冊、杭州正則印書局、一九三五年、四〇——七八ページ。
- (18) 乾隆『烏程縣志』卷十一鄉鎮。道光『南潯鎮志』卷一疆域。咸豐『南潯鎮志』卷一疆域。
- (19) 『中國經濟志』浙江吳興長興分冊、二〇——二三ページ。
- (20) 咸豐『南潯鎮志』卷二十一農桑二。
- (21) 民国『烏青鎮志』卷二十一工商・桑葉業。
- (22) 咸豐『南潯鎮志』卷二十一農桑二。
- (23) 咸豐『南潯鎮志』卷二十四物産。
- (24) 民国『南潯志』卷二公署。
- (25) 咸豐『南潯鎮志』卷二十四物産。
- (26) 民国『南潯志』卷三十一農桑二、温豐「南潯糸市行」。
- (27) 咸豐『南潯鎮志』卷二十四物産。
- (28) 咸豐『南潯鎮志』卷四衢巷。
- (29) 徐猷忠『吳興掌故集』卷十三物資、卷十二風土。

- (30) 董斯張『吳興備志』卷二十六方物征。
- (31) 乾隆『湖州府志』卷四十一物產。
- (32) 咸豐『南潯鎮志』卷二十一農桑・蚕事綜論。
- (33) 乾隆『湖州府志』卷三十七蚕桑。同治『湖州府志』卷三十蚕桑。
- (34) 咸豐『南潯鎮志』卷二十一農桑一。
- (35) 咸豐『南潯鎮志』卷二十四物產。
- (36) 咸豐『南潯鎮志』卷二十一農桑二。
- (37) 潘尔夔『潯溪文獻』咸豐『南潯鎮志』卷二十四物產。
- (38) 民国『南潯志』卷三十一農桑一。
- (39) 劉大鈞『吳興農村經濟』、上海大瑞印書館、一九三八年、一二二二ページ。
- (40) 温鼎『見聞偶錄』、民国『南潯志』卷三十一農桑二。
- (41) 道光『南潯鎮志』卷首凡例。
- (42) 范穎通『研北居瑣錄』、咸豐『南潯鎮志』卷六古蹟。
- (43) 朱国禎、萬曆十七年進士、天啓初、拜禮部尚書兼文淵閣大學士。沈淮、萬曆二十年進士、光宗立、召為禮部尚書兼東閣大學士。温体仁、萬曆二十六年進士、崇禎初、官至禮部尚書兼東閣大學士。
- (44) 董份、嘉靖二十年進士、官至禮部尚書兼翰林學士。沈演、萬曆二十年進士、官至南京刑部尚書。
- (45) 道光『南潯鎮志』卷六選舉志・科第。
- (46) 王道隆『孤城文獻』、光緒『烏程縣志』卷二十八風俗。
- (47) 咸豐『南潯鎮志』卷二十三風俗。
- (48) 同上書。
- (49) 道光『南潯鎮志』卷一風俗、咸豐『南潯鎮志』卷二十三風俗。
- (50) 乾隆『烏程縣志』卷十一鄉鎮。
- (51) 乾隆『烏程縣志』卷一沿革。
- (52) 同上書。
- (53) 『烏青文獻』卷首・旧序、陳觀『校正烏青志序』。

- (54) 『烏青文獻』卷一建置。また巡撫謝鵬舉・巡按蕭慶の「復添設館府佐員疏」にも、「本鎮……居民殆万家、又爲烏程之巨鎮……乃若烏鎮一區実爲浙西壟斷之所、商賈走集四方、市井數盈于万户。」と述べる。
- (55) 万曆『湖州府志』卷三鄉鎮。
- (56) 『烏青文獻』卷二門坊、卷一疆域。
- (57) 乾隆『烏青鎮志』卷二形勢。
- (58) 嘉靖『浙江通志』卷十四建置志。
- (59) 乾隆『烏青鎮志』卷二形勢。
- (60) 民国『烏青鎮志』卷十二坊巷。
- (61) 同上書。
- (62) 民国『烏青鎮志』卷四疆域、卷十二坊巷。
- (63) 『烏青文獻』卷一疆域、乾隆『烏青鎮志』卷一疆域。
- (64) 民国『烏青鎮志』卷二十二工商。また輪船があり、例えば招商局・通源局・王清記局・公大局・鴻大局・翔安局・寧新局などの汽輪・煤輪の航路があつた。
- (65) 徐猷忠『吳興掌故集』卷十三物産・農桑。
- (66) 同治『湖州府志』卷三十輿地略・蚕桑。
- (67) 民国『烏青鎮志』卷二十一工商。
- (68) 『烏青文獻』卷三土産。
- (69) 崇禎『烏程県志』卷二鎮、卷四物産。
- (70) 『烏青文獻』卷三土産。
- (71) 民国『烏青鎮志』卷二十一工商。
- (72) 『烏青文獻』卷三農桑。
- (73) 同上書。
- (74) 同上書。
- (75) 乾隆『烏青鎮志』卷十二旧聞。乾隆『烏程県志』卷十三風俗。
- (76) 民国『烏青鎮志』卷二十一工商。

- (77) 『烏青文獻』卷首、夏焯序。
- (78) 乾隆『烏青鎮志』卷二形勢。
- (79) 『烏青文獻』卷二村落、卷四進士、卷五文苑。
- (80) 光緒『菱湖鎮志』卷一輿地略、引龐太元『菱湖志』。
- (81) 光緒『菱湖鎮志』卷一輿地略・疆域。
- (82) 光緒『婦安県志』卷六輿地略・区域村鎮。
- (83) 光緒『菱湖鎮志』卷一輿地略・疆域。
- (84) 光緒『菱湖鎮志』卷四十二前事略・事紀、引孫銓『又与任邑侯書』。
- (85) 光緒『菱湖鎮志』卷十輿地略・風俗、引王繼祀「重修永寧禪院碑記」。
- (86) 光緒『菱湖鎮志』卷一輿地略・疆域、引万曆『婦安県志』。
- (87) 同治『湖州府志』卷二十二輿地略・村鎮、光緒『婦安県志』卷六輿地略・区莊村鎮。
- (88) 乾隆『湖州府志』卷十五村鎮。
- (89) 光緒『菱湖鎮志』卷十一輿地略・物産。
- (90) 乾隆『湖州府志』卷三十九風俗。
- (91) 万曆『湖州府志』卷三物産。
- (92) 天啓『吳興備志』卷二十九瑣征。
- (93) 光緒『菱湖鎮志』卷十一輿地略・物産。
- (94) 同上書。
- (95) 光緒『菱湖鎮志』卷十九選舉志・進士。康熙に三人、雍正に四人、乾隆に十七人、嘉慶に五人、道光に二人、同治に一人、光緒に二人がある。
- (96) 同治『湖州府志』卷二十二輿地略・村鎮。光緒『婦安県志』卷六輿地略・区莊村鎮。民国『双林鎮志』卷一方域。
- (97) 民国『双林鎮志』卷十八戸口。
- (98) 同治『湖州府志』卷二十二輿地略・村鎮。
- (99) 同上書。
- (100) 民国『双林鎮志』卷首、釋道元「双林鎮輿地図説」。

- (101) 民国『双林鎮志』卷四街市。
- (102) 民国『双林鎮志』卷十六物産。
- (103) 民国『双林鎮志』卷十二碑碣。
- (104) 乾隆『湖州府志』卷四十一物産、引『双林志』。
- (105) 同上書。
- (106) 嘉慶『東林山志』卷十三土風。双林はまた東林とも呼ばれた。
- (107) 光緒『帰安県志』卷二十芸文。
- (108) 民国『双林鎮志』卷二水道。
- (109) 同上書。
- (110) 民国『双林鎮志』卷十五風俗。
- (111) 同上書。
- (112) 『烏青文獻』卷三農桑。民国『双林鎮志』卷十四蚕事。
- (113) 民国『双林鎮志』卷十六物産。
- (114) 姚典簿『穀庵日記』、民国『双林鎮志』卷十六物産。
- (115) 同上書。
- (116) 民国『双林鎮志』卷十五風俗。
- (117) 民国『双林鎮志』卷八公所。
- (118) 民国『双林鎮志』卷十七商業。
- (119) 唐甄「教蚕」(『皇朝經世文編』卷三十七所収)。
- (120) 民国『双林鎮志』卷十五風俗。
- (121) 民国『双林鎮志』卷十六物産。
- (122) 同上書。
- (123) 民国『双林鎮志』卷十七商業。
- (124) 民国『双林鎮志』卷八公所。
- (125) 民国『双林鎮志』卷十五風俗。また、「其石工・木工・染工・雑工大半来自他郷、油坊工匠多来自長興・江寧、其余各業則主客參半」とあ

る。

(126) 嘉慶『東林山志』卷二十三芸文志。

(関西大学交換教授・復旦大学副教授)

(付記)

著者樊樹志は中国上海市復旦大学助教教授であられ、我が関西大学の招聘で来日された機会を利用して、九州大学で学術講演を行われた(一九八六・十一・二〇)。本稿はその原稿である。九州大学の学術講演に当っては氏のみならず、関西大学当局、ことに同東西文化研究所、大庭脩教授、松浦章教授の御尽力によるところが多い。記して関係各位に深謝する次第である。なお、樊樹志教授は、九州大学では私(川勝)の行っている通常の大学院演習(「清朝檔案の研究」)に九一日に近い時間出席され、我々を裨益されたことも併せて記しておきたい。

樊樹志教授が帰阪されて私への親書に次の文言がある。
我的論文能在九州大学「東洋史論集」發表、对我的學術生涯有深遠的意義。因為中国学者在日本用日語發表論文者、尚屬罕見。我的努力奮闘、為兩國的學術交流增添了一点新色彩。

海内存知己、天涯若比鄰。願我們之間的友誼与日俱增。

(川勝守記)